

# 第一章 研究目的と方法について

## 1. 問題意識

現代産業社会の急激な変化にともなって、教育訓練のあり方があらゆる方面から検討されている。

学校教育、特に後期中等教育について、昭和41年10月、中央教育審議会は「後期中等教育の拡充整備について」の諮問に対して答申を行ない、また昭和44年11月に、文部省は「わが国の教育のあゆみと今後の課題」を報告している。

職業訓練においては、昭和44年10月に職業訓練法が改正施行され、「青少年に対する職業訓練は特に、その個性に応じ、かつその適性を生かすように配慮して行なわれなければならないものとする」という一項が加えられたのは周知のとおりである。

このように、15才から20才段階の青少年の教育訓練については、法律において適性、能力の配慮がしきりとさげられる趨勢にある。

しかし、実際の学校教育および職業訓練をみると、適性、能力などはまったく、あるいはほとんど配慮されておらず、生徒および訓練生に諸々の問題が発生し、ことに、職業訓練においてはその問題解決を回避しては教育訓練機関としての機能を十分に果しえないとまで論じられる深刻な段階にいたっている。

職業訓練生に焦点をしばって、現状をみると、次のような問題点がある。

公共職業訓練の主な対象である中卒訓練生についてみると、第1に、高校進学率の上昇、各種学校など教育機会の増大、中卒者の絶対数減少、企業における中卒者需要の緊迫等の影響をうけて、職業訓練校への応募者が減少し、それにともない、訓練生の知的能力が低下しているといわれることである。

第2に、中学校から職業訓練校への進路を決める場合、「高校にいけなから職業訓練に決めた」など、いわゆる「学業成績によるふりわけ進路指導」の影響をうけて、自己の意志にもとづかない進路決定が多くなっている。そのためか、せっかく、訓練校に入学しながら、中途退校する者が他の教育機関よりも多いといわれており、このような中退現象を指導員が特別の問題として意識しないほどに漫性化していることが問題としてあげられる。

このような訓練生に関する重要な問題点がありながら、従来は訓練生数の増減や労働者数の不足など訓練生の数量的調査に重点がおかれ、訓練生の資質に関する調査研究はおこなわれていなかった。

そこで、われわれは、訓練生の資質の問題を実証的に研究することにした。訓練生の資質の問題をとりあつかうにあたって、単に職業訓練校の訓練環境や訓練条件など外的な要因を考察するにとどまることなく、訓練生個々の心理的側面である広義の適性の問題としてとらえていく必要があると考えたのである。

つまり、現実におきている訓練生に関する諸々の問題を解決し、職業訓練を發展させる1つの鍵は、訓練生の本当の適性能力をつかまえ、それにもとづく職業訓練を實踐することにあると考える。

新職業訓練法にうたわれているように「適性、能力を生かす」という要件を名目としての個性尊重にとどめることなく、ひとりひとりの青少年を生かす職業訓練として、実質的に展開する必要があると思われる。

そのためには、訓練生の適性、能力に関する情報がまず客観的に収集されねばならないであろう。このような問題意識から、本研究は出発しているのである。

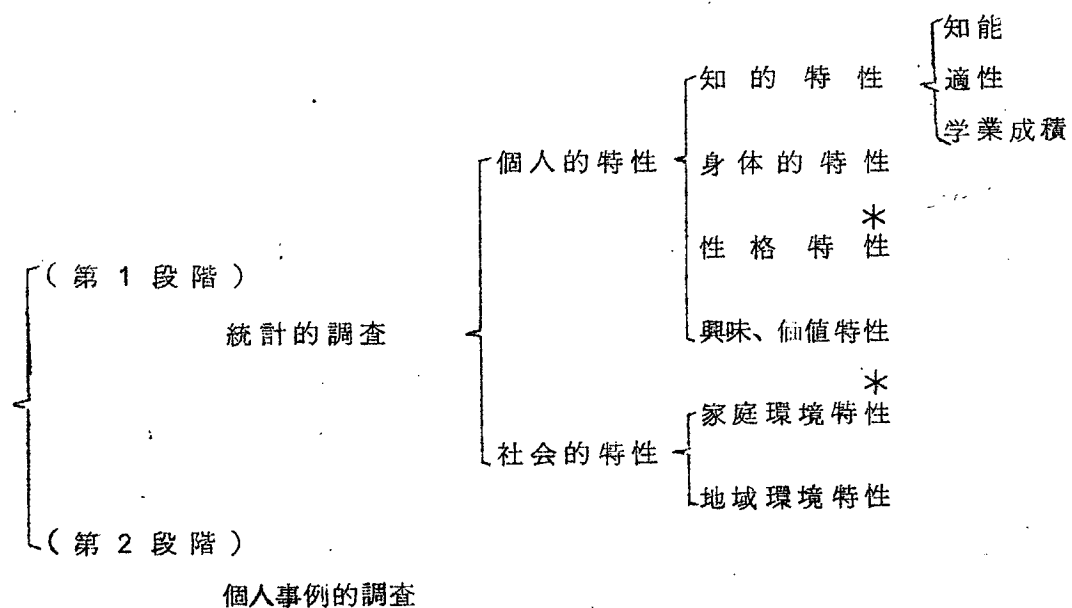
## 2. 訓練生調査の全体構成

青少年ひとりひとりの能力、適性を生かす効果的な養成訓練を検討するには、究極的にはひとりひとりの訓練生についての能力、適性に関する個別的な情報資料が重要になる。

しかし、その前段階として公共職業訓練における訓練生集団の特性を把握しなければ、個々の訓練生を理解することも不可能である。

そこで、本研究では、訓練生に関する調査の全体構成を第1図のように設定し、第1段階として、訓練生個人に対して実施された諸調査は各特性ごとに統計的に処理され、訓練生間の差異、つまり個人間差異を考察する基礎として、訓練生集団特性の実態を明確にする。

つぎに、第2段階として、さきに求められた訓練生集団特性との関連において、訓練生個人を中心にして、個人的特性ならびに社会的特性の相互関連からみた訓練生ひとりひとりの内面における特徴の差異、つまり個人内差異についての訓練生の特性実態を分析する。



第1図 訓練客体調査の全体構成

\*) 「総訓練生集団の性格特性の実態」 報告書 1971.10 発行予定

\*) 「総訓練生の家庭環境の実態」 報告書 1971. 8 発行予定

### 3. 素質調査の目的

このような訓練生調査の全体構成のうちで、われわれがまず、とりあげたのは訓練生に関する知的特性実態の調査である。

知的特性の中でも、環境によって比較的变化しにくい特性としての知能、職業適性を仮に「素質」と名づけ、訓練生の素質の実態を科学的に把握することにした。

この素質調査は昭和43年度に第1回調査が実施され、44年度および45年度に同一方法によって継続調査された。

44年度報告までの調査結果の考察は、広い視点から職業訓練全般のあり方についておこなわれた。

本報では、過去3年間の総合報告として、進路指導と職業訓練との関連に重点をおいて考察することにし、つぎの点を明らかにすることを目的とする。

① 後期中等教育諸機関の中で、総合高等職業訓練校（総高訓）は素質からみてどのような位置にあるか、また、その位置は年次的に変化しているか。

② 総訓練生集団の素質傾向（平均値と標準偏差）はどのようになっているか。

また、その素質傾向は年次的に変化しているか。

さらに、各地域の総高訓、および訓練職種によって素質傾向にどのような差異がみられるか。

③ 総高訓で学んでいる青少年の素質および、職業興味特徴はどんなところにあるのであろうか。また、総高訓への進路選択の様相はどのようになっているか。訓練生ひとりひとりの事例をとりあげ、総高訓の訓練生の個別的な実態を明らかにする。

このような実態分析を通じて、訓練生ひとりひとりの適性、能力に応じられる職業訓練をどのように展開すればよいか、若干の考察を行なうものである。

### 4. 素質調査の方法

#### I. 総合高等職業訓練校での調査

##### a. 調査対象

総合高等職業訓練校（以下、総高訓と記す）2年課程の1学年在籍、男子を対象として10月から11月の間に調査した。調査対象校は全国各地域より、無作為に選定した。

調査年度は昭和43年、昭和44年、昭和45年の3年間である。調査対象者数は各年度別にみると、第1表のごとくである。

年度	43	44	45	延べ数
総高訓数	10	15	19	(44)
中卒訓練生数	777	1440	1631	(3848)
高卒訓練生数	188	274	368	(830)

第1表 調査対象者

なお、昭和45年の調査対象者の詳細は第3表に示す通りである。

## b. 調査内容

訓大調査研究部の専門テスターが各総高訓に出張し、集団方式によって次のテストを実施した。

- (イ) 田中B全式知能検査
- (ロ) 労働省編職業適性検査
- (ハ) 藤原式職業興味検査

さらに、45年度には (ニ) 矢田部ギルフォード性格検査、(ホ) 家庭経済状況調査を実施している。

## II. 中学校訪問調査

### a. 調査対象

各総高訓において、比較的多数の生徒を総高訓に入校させている中学校を各地域とも2校選定し、総訓生を含む中学3年次の学級の生徒全員を調査対象とした。

年次	43	44	45	延べ数
調査総人数	352	941	1348	(2641)
総訓生人数	41	92	113	(246)

第2表 中学校調査対象数

### b. 調査内容

学習指導要録の閲覧を通じて、後期中等機関への進路の種類、知能偏差値、3年次の学業成績(国語、数学、理科、技術)を調査した。

また、第3年次の担任教師に面接し、総高訓入校の動機および中学校での学習状況についても調査した。

なお、統計処理はすべてコンピューター

FACOM230-20およびFACOM230-25を使用している。

第3表 調査対象者

(昭和45年調査)

( )内は高卒訓練生数

職種 総計	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	中卒 (高卒)	高卒者率
01		32 (1)		28	22			25			26		(18)													165 (19)	10.3
02		23 (3)	23 (5)	25	10 (7)					26					20											127 (13)	9.3
03			23		16	13	16	11	11 (3)		22				22											123 (3)	2.4
04			15	16 (1)	15	11 (4)	11 (1)	5						4												77 (8)	9.4
05	18 (5)		19	14	21 (7)																					89 (18)	1.68
06	6 (6)	13 (2)			9 (12)	13 (2)				11	7 (3)															59 (25)	29.8
07			16	11	9	20	13	7			10	12														98	
08		11	18 (1)		9	14																				52 (1)	1.9
09			23	19		17	17	5									16			18						115	
10		4 (1)	14 (6)	11	7 (2)	5 (41)	10 (5)	4	3 (1)		8															66 (58)	45.2
11	(5)	22	35		19 (7)	15 (2)	13	13		20	7	(6)								12 (3)	5 (2)					161 (25)	13.4
12		18 (3)	16 (2)		20 (10)	17 (2)				8	4	(1)	(2)										(3)	(7)		83 (20)	19.4
14		16 (4)	20 (1)		(14)	19 (2)	11 (4)			17 (1)																83 (26)	23.8
15	19 (2)		22	23	19 (2)	11				14																108 (4)	3.6
16			16		13 (4)	14 (1)				12 (5)																73 (8)	9.9
17	(18)	11 (2)	10 (1)		4 (10)					7			(17)													32 (48)	60.0
18	(16)	(11)	8		(21)	5																				113 (48)	78.7
19		13 (5)	9 (3)		9 (8)	12 (3)	7 (5)			12	7 (1)				8			5 (3)								87 (26)	23.0
20	(10)		9		7															3 (4)	1 (4)					20 (18)	47.4
中卒	45	150	341	147	7	207	156	145	66	3	175	39	16		4	50		16	5	12	26	1			5	1631	
高卒	(60)	(30)	(19)	(1)	(2)	(149)	(13)	(16)	(3)	(1)	(4)	(4)	(1)	(43)				(3)	(3)	(3)	(6)	(4)	(3)	(7)		368	18.4
高卒者率	58.2	16.7	5.3	0.7	2.2	41.9	7.7	9.9	4.3		2.2	9.3	5.9	100.0				37.5	2.00	19.4						2014	